

CONTENTS

文化庁月報

1994 **11** No.314

特集●地域社会と文化財―「活用」の将来的展望

■ 巻頭言	これからの史跡等の保護と活用	坪井 清足	4
地方公共団体の取組の事例	1 越前朝倉氏のふるさと(福井県)	岩田 隆	14
	2 「世界遺産の村」をめざして(平・上平村)	岸本 雅敏	16
	3 東北律令の里(酒田市)	小野 忍	18
	4 コウノトリのまち(豊岡市)	廣井 大	21
	5 大地震の爪跡(根尾村)	所 美千敏	23
	6 よみがえる古代史(大阪府)	広瀬 雅信	25

■ てい談	文化財のある豊かなくらしを求めて	後藤宗昭／櫻木左久雄／増渕 徹(司会)	7
-------	------------------	---------------------	---

都道府県のページ

一度は行きたい博物館・美術館⑩

河北町紅花資料館 30

法人紹介～文化に息吹を～

坪内逍遙の研究と顕彰、日本演劇の発展をめざして

(財)逍遙協会 34

ACA(Agency for Cultural Affairs)NEWS

- ・コンピュータ・プログラムの管理に関する調査研究協力者会議の開催 ……36
- ・平成5年度(第28回)現代美術選抜展 ……36
- ・「白川郷・五箇山の合掌造り集落」を世界文化遺産に推薦 ……37
- ・近代の文化遺産の保存と活用に関する調査研究 ……38
- ・『歩き・み・ふれる歴史の道』のシンボルマーク募集 ……38
- ・第41回日本伝統工芸展開催される ……39

イベント案内

第44回全国民俗芸能大会／日本青年館ホール	41
第12回伝統工芸人形展／松坂屋上野店	42
角屋の美術／京都国立博物館	43
上賀茂神社の絵図と文書／京都国立博物館	44
飛鳥の一と／飛鳥資料館	45

ちよつと一息

幕末日本の宝の山／芳賀 徹 ……28

- 著作権法利用講座⑩ ……33
- 芸術文化振興基金ニュース ……46
- 今月の国立劇場 ……47
- 編集後記 ……48



「風とあるく」(平成5年度文化庁賞上作品)

堀 研／作

ほり・けん／昭和23年山口県生まれ。48年多摩美術大学卒。49年から宇都女子高等学校で8年間教員を勤める。その傍ら、現代日本絵画展・西日本新人ビエンナーレ大賞(50年)、行動展奨励賞(54年)・新人賞(55年)、行動美術賞(56年)、安井賞佳作(57年)、昭和会賞(58年)など活躍。現在は行動美術協会会員。



大阪文化財センター理事長
坪井 清足

不動産文化財

文化財のなかで記念物とは、史跡、名勝、天然記念物の三本柱からなっている。天然記念物には各種動物、昆虫、魚類から植物なども含まれるが、主として土地に結びついた不動産文化財が大半を占めている。この点美術工芸の主として動産文化財と性格が異なっている。建造物は不動産文化財であるが——一部移築して保存する例もある——わが国では明治以来美術工芸品とともに記念物行政のはじまる以前から保護の対象となっていて不動産文化財を主とする記念物と別個にあつかわれている。

史跡保存整備の移り変わり

文化財指定物件は現状を保護することを目的としているが、なかでも史跡は大正五年の史蹟名勝天然記念物保存法施行以来、指定物件の姿はそのものが創設以来幾多の歴史の変遷をたどって今日の姿になったのであるから、現状のままで保存し、一木一草といえどもみだりに損壊してはならないという哲学によって指導されてきた。史跡のなかで地上に現在

巻頭言

これからの史跡等の保護と活用

建物や構造物が残っているものは見てわかるが、宮殿、官衙、廃寺、城塞、集落跡など埋蔵文化財関連遺跡は、一般の人々がそこを訪れても、指定名称の石碑と説明板があっても田島、原野、山林だけで、何が保護の対象になっているかわからないありさまであった。史蹟名勝天然記念物保存法の制定された大正

年間には、一部のししか予測できなかった考古学的発掘調査技術の進展で、これら埋蔵文化財遺跡が地下によく残っていることがわかり、この成果を史跡の保存に活用すべきとの気運が昭和三十年代から強くなってきた。戦時中一部広大な史跡指定地を畑地に開墾するなどの荒廃を経て、昭和三十年代の復興期に全国的に開発にともなう埋蔵文化財の破壊が問題となり、在野の保存運動もたかまり、遺跡を護るための史跡指定の促進、指定地の買上げによる土地の公有化が大きくとりあげられ、その結果公有化した史跡の整備が緊急必要な事業となってきた。

昭和三十七年平城宮跡の保存の目処がたちはじめたころ、奈良国立文化財研究所の平城宮跡発掘調査に従事していた技官が、広大な平城宮跡全域の整備に直面して保存整備の骨子になる案をつくりあげた。

A 遺構の上に覆屋をもうけて地下遺構の実物をみせる方法。

B 遺構の上に盛土して遺構の保存をはかり、その上に遺構の規模を示す造園的工夫をする。

C 遺構を盛土で保存しながらその真上に現寸大の遺構を復元する。

構に影響を与えないで基礎づくりするには余り大きなものはつけれない。平城宮跡では昭和三十九年に一辺二十八メートルの正方形の覆屋を、仕上り三十センチの転圧基礎土上にベタ基礎を置いた鉄骨造覆屋として完成した。この試みは、その後各地で調査後その地はどうしても建物を建設しなければならぬ場合の参考となっている。

Bは、日本の地下遺構は多雨と霜害などかはげしいため露出展示ができない。発掘された遺構を埋めどし、その上に遺構の範囲を表現し、建物の場合柱位置に、礎石の場合石または擬石、掘立柱はツグなど剪定できる植栽で表示することを考え、平城宮跡第二次内裏の発掘成果を明示した。この方法は費用の点でA・Cに比べ安価で、全国の官衙、寺院遺跡などで「平城方式」といわれて多くもちいられている。ところがそれまで厳密な現状保存方式になった人々には大きな変改とらえられた。この方式も、やはり一般の人々にはなかなか理解しにくかった。

そこで史跡地に現寸大の建物を復元するC方式が昭和五十年代後半から積極的にとりいれられるようになった。先史時代の竪穴住居の復元や戦災等で失われた近世城郭の天守閣や櫓の復元は戦後早くからおこなわれてい

文化財をいかしたまちづくり・むらおこし

てい 談

文化財のある豊かなくらしを求めて



後藤 宗昭 ● 大分県竹田市長
櫻木 左久雄 ● 福島県下郷町長
増 渕 徹 ● 文化庁記念物課文化財調査官 (司会)

文化財の適切な活用と一口にいいますが、「適切な」という事柄の中身は大変に難しい部分を多く含んでいます。本物であるがゆえに文化財としての価値があるということになりますと、いろんなアイデアが必要でしょうし、それゆえに悩みもあらうかと思えます。竹田市には有名な岡城をはじめ国の史跡が

増渕 文化庁では全国の文化財の保存行政を担当しておりますが、特に最近、地域の文化財に対する関心、あるいはそれを活用しようという要求が大変に強くなってきているという感じをもっています。また、そういった住民の方々の声を反映して、地方自治体でも文化財を将来のまちづくりに生かしていこうという取組みをしているところも増えてきていると感じています。

現在までの取組み

三つあります。また、下郷町には中山風穴、塔のへつりといった天然記念物が二つ、会津西街道につくられました大内宿という重要伝統的建造物群の有名な集落があります。まず竹田市長さんのほうからお願いできますでしょうか。

後藤 竹田市は史跡岡城跡を中心にして、国指定の重要な文化財がたくさんあります。特に岡城跡は公有化が実現しまして、現在、保存や活用に向かって努力をしています。ところで、竹田市は「荒城の月」「東洋のレモン」のカボス、それから「名水日本九州は竹田の水」と、三つのコンセプトを中心にまちづくりを進めているところです。「荒城の月」のルーツはもちろん史跡岡城跡ですが、瀧廉太郎先生が小さいころにそこで育ちまして、そのイメージがメロディーになった。市民だけでなく、観光客も瀧廉太郎先生ゆかりの岡城を見たいということで、市で廉太郎先生がお住まいになっていた廉太郎屋敷を復元しまして、「瀧廉太郎記念館」として活用させていただいています。着実に観光客もふえています。

そのほか、岡藩主おたまや公園の整備、あるいは歴代の藩侯が客を招いた御客屋敷なども、市のほうで復元をしまして、これも現在、

たが、全く地下遺構しか残らない史跡に復元の建造物を構築することは平城宮跡第二次内裏外郭宮内省推定地の官衙建物、宮城南辺の築地堀等の建設ではじまり、平城宮跡ではいまや朱雀門、東院東南隅の園池、門、築地の復元までが実施されるようになった。地方では昭和四十年の大阪府百済寺跡、神戸市五色塚古墳の整備をかわきりに、主としてB方式で官衙、寺院跡などの整備が実施されてきた。昭和六十年代から現存建物復元方式がとりいられ、東北各地の城柵遺跡、各地の国分寺、同尼寺の復元建物が実施され、福井市の一乗谷朝倉氏遺跡の武家屋敷の復元など、文化庁記念物課の「ふるさと歴史の広場」「地域中核史跡等整備特別事業」などの指導のもとに続々と実施されるようになってきた。なかでも楼閣を築き、堅穴住居や倉庫を黒独自で仮整備した吉野ヶ里遺跡は大変な人気をよぶなど、現存遺構復元は一般の人々に大変好評をよんでいる。

保存整備の問題点

最後に記念物文化財の保護は活用化と相いれない性格がある点も注意すべきであろう。天然記念物のある種のものでは心ない人々による採取、破壊によって滅失あるいは維持困難になったもののあることや、尾瀬沼のよう

られることである。なかでもサー・アーサー・エバンスが心血を注いだクレタ島のクノッソス宮殿は復元の行き過ぎとの批判から、その他の遺跡ではこれをひかえるようになったという。わが国でも古代七・八世紀の建築は奈良県に指おって数えるほどしか遺存せず、最近各地で復元される八脚門といえは、いずも法隆寺西院東門ないし東大寺転害門の写しで、東北の城柵、官衙の門までもそのようなものだったのかというデザイン上の問題がみられる。しかし復元には資料の絶対的不足から試行錯誤はつきもので、それぞれの時点で衆知を集めて実施し、問題が明るみに出れば次にはこれを改善しながら実施しなければならぬということも宿命である。

に限度をこえる入山者を規制せねばならない問題、高松塚古墳のように物理的に一般人の観覧に供したいもの、管理体制の不十分のままに肝心の文化財の損壊をまねくことのないようにする必要がある。特に管理体制の問題は、活性化をのぞむといながら、財政的人的十分な対応をないがしろにした事例があまりにも多い点で関係当事者全員に注意をうながすものである。なかでも、各地の風土記の丘事業は、当初広域な史跡指定地の保護管理を主眼に考案した対策であったが、多くの場合現地状況説明展示のほか、地域の博物館として企画展示に奔走して、遺跡の保護管理がなおざりになっていないか、それはより小規模な史跡の施設の場合にも同様な傾向がみられるので初心にかえっていただきたいものと考えている。

史跡をはじめ記念物文化財は後々の人々のために保護しなければならないものである。ことはいうまでもないが、多くの人々の理解と協力によつてはじめてその目的を達成することができるとのである。そのためには今後ますます増大するであろう知的観光資源の中心的役割をはたす記念物文化財の高い学術的価値を、わかりやすくするための整備その他の工夫が、活用につながるものといえよう。

くだらないで、新しい大内宿の創造にもみずから努力をして、今、一生懸命に頑張っています。それらの文化財が下郷町民みんなの心のふるさと、誇りなんだという気持ちで、町民挙げて大内宿に親しみをもちながら生活をしているということです。

それから中山風穴地特殊植物群落は普通二千メートル級の高山にしか生えない高山植物が、六百メートルから七百メートルぐらいの高さの風穴の中に可憐な花を咲かせているということ、今、お客さんがたくさん来るようになってきています。ここはそれらを中心

下郷町大内宿伝統的建造物群保存地区
大内宿は、若松城下と下野の今市を結ぶ南山通りの宿駅の一つであった。現在、重要伝統的建造物群保存地区として旧南山通りに沿った宿場を中心とした、南北約500メートル、東西約200メートルの範囲が指定されている。宿場当時の姿をよく残し、旧街道の両側に寄棟造、茅葺の主屋45棟が道路に面し前庭をとって整然と建ち並んでいる。

本地区は会津及びその周辺地域にみられる宿場形態の典型的なものの一つで周囲の自然環境もよく価値が高い。



茅葺きの大内宿と雪まつり開催中の町並み展示館

住民主体の活用

増淵 雪祭りというのは、具体的に

とした公園化ということをやっています。

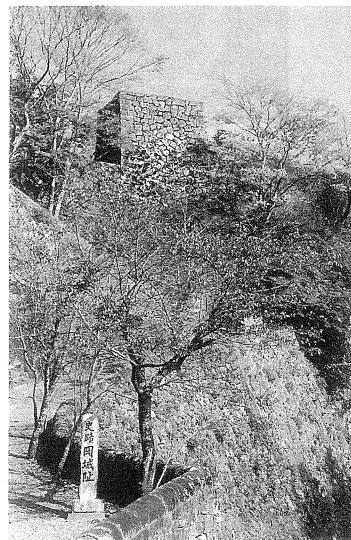
にどんなことをやられているわけですか。
櫻木 本陣（町並み展示館）の前の広場にかまくらを三つ四つつくったり、町並みの一軒一軒に雪灯籠をずうっとつくりまして、冬の町並みの景観に情緒を添えているわけです。本当に素朴なことですけども、自分たちでやろうと言いついて、昭和六十二年二月十四日に第一回が開催されて、以来続いておられます。大阪あたりからも観光客が来まして、大内宿の一つのイベントとして定着してきたと思っています。若松に古い店の人たちがずっといる復古会という組織があるわけです



中山風穴のヤナギラン

なかなか格調の高いイベントです。「もぐら会」のテーマは「人間サイゾのまちづくり」で、背伸びはしないでやっていますので、私も感心を見ています。行政としては、今年も、瀧廉太郎先生を偲

史跡・岡城跡
岡城跡は、大分県竹田市にあり、名曲「荒城の月」ゆかりの城として知られる。尾根状の丘陵地に造営され、周囲は溶結凝灰岩の断崖絶壁をめぐらし、前後に流れる白滝川、稲葉川は天然の大堀ともいえる深い谷を刻み、堅城として知られる。文治元年(1185)に築城されたと伝承されているが、現在の城構えは文禄3年(1594)に入部した中川氏の手により築かれたものである。石垣その他の構築物、建造物などの残存状況がよく、昭和11年に史跡指定を受けている。



紅葉の岡城跡大手門

取組み例などお願いします。

櫻木 下郷町は人口八千五百人、面積三百七平方キロ、ほかと比較しますと、広い面積の中で人口が過疎化しつつあるということ、過疎化をどういうふうに進めようかというところが地域全体の悩みの種です。

幸いなことに下郷町は、いろいろな文化財をはじめとして、自然、歴史等がありますから、それらを活用して、都会で一生懸命に働いている方々が来られて、下郷町の自然、あるいは歴史や文化等に接していただいて、活力をたくわえてお帰りのいただく。そういうような交流の場も必要だろうということで、「定住と交流」をモットーに町政を進めています。

文化財は国指定の天然記念物として塔のへつり、中山風穴地特殊植物群落がありますし、国指定の重要文化財としては旭田寺の中の沢

観音堂、それから国選定の重要伝統的建造物群保存地区として大内宿があります。そのほかに県指定の重要文化財、あるいは町指定の有形文化財等多々あるわけです。これらを町の活性化にどうつなげていくのかということ、努力しているわけでありまして。

その中で、大内宿は昔の宿場で、宿場町の選定は全国で三つありますが、そのうちのひとつです。殊に茅葺屋根の集落ということになりますと、全国唯一であるといわれています。この大内宿をいかに保存していくか。

大内宿は昭和五十六年四月十八日に選定されて以来、テレビアンテナあるいは電話等の支柱、電柱を全部集落の東と西の、町並みの後ろに移しまして、電柱等のない町並みにしたわけです。また、本陣は現存していませんが、たんですが、補助金をいただき、本陣跡に町並み展示館という施設をつくりまして、その整備を図りました。

そのほかに住民の皆さん方が、「雪がせつかく降るところだから、雪祭りをやるうではないか」ということで、地味ですが、大内宿にふさわしい雪祭りを自分たちの手で二月にやっています。そういう独創的なものを作って、大内宿の保存・伝承ということと同時に、江戸時代のものを復元することばかりに

が、その人たちが一緒に手伝ってくれて、自分たちの力で、自分たちの手で雪祭りをやっています。すばらしいことだと思っています。

増淵 大内宿の場合は、伝統的建造物群ですから、そこに既に住んでいる方がいらつしゃる。言ってみれば、生きた形のままで保存して活用していくという出発点がありますから、そういう中で、住民のほうから任意創造的な形態が生まれてきたらいいと思います。竹田市でも行政のほうで何か活用計画を立てたり、あるいは地元の方からそんな声が起こつたりというのはおありでしょうか。

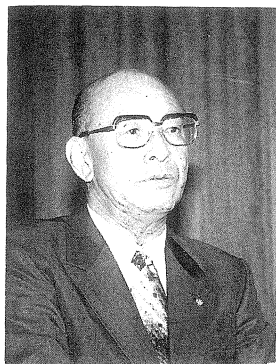
後藤 「もぐら会」というのがありまして、岡城の腹壁に「元禄十五年これを彫る」という銘の三日月岩がありますが、その三日月岩を活用して新能を毎年実施しています。これはなかなか格調の高いイベントです。「もぐら会」のテーマは「人間サイゾのまちづくり」で、背伸びはしないでやっていますので、私も感心を見ています。行政としては、今年も、瀧廉太郎先生を偲

地域社会と文化財——「活用」の将来的展望

しかし、過去を学ばないと現在がわからない。そういう意味で、歴史を学び大切にしていこうではないか。ただ、現在のことを忘れた歴史というのは、歌を忘れたカナリヤと一緒に、やがて見捨てられていきますよと。文化財なり歴史というのが今目的に一体どういう意味を持つておるのか、お互いに十分考えながら論議していきましようという問題を提起したんです。

岡城は今日的に非常にすばらしい教訓を与えていただいていますから、大事にすることには変わりないんですが、最近では、皆さん意欲があるものですか、今日だけではなくて、未来についても岡城を何とかしたいという気持ちがあるんです。だからといって、岡城の文化財を壊すことは絶対まかりならんわけです。あの遺跡を守りながら、その要望にこたえる時期に来ておると思います。

櫻木 私には二つの側面を持つていると思います。一つは、地域住民の人たちが文化財をどういうふう認識しているのか。その文化財によって受ける影響はどういうものなのかということだろうと思います。もう一つは、下郷町を訪れる人たちがその文化財に接して、それによってどういう喜びを持つて帰ることができるのかという二つの側面を持つてい



櫻木 左久雄町長

と思います。

そういう意味で、狭い考え方もかもしれませんが、大内宿というのは下郷町にとって代表的な集落だと評価しているわけです。大内宿の住民たちにもそういうふう言っています。というのは、あの町並みが、大内宿一軒一軒が生活の根拠であるということです。生活と保存を両立させていくには、そこにいろんな問題をやらねばならないと思います。しかしながら、観光客がどんどん来るようになってきている。そして、自分たちがここを保存していかなくてはならないということ、婦人会の人たちが毎週一回大内宿じゅうを清掃しているんです。これは大内宿という一つの存在によって引き起こされた心の動きです。ね。美しいまちをつくっていかうという動きが出てきている。

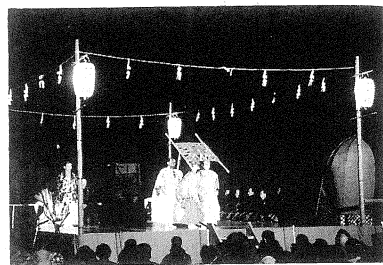
ただ問題は、大内宿は茅葺の屋根ですから、

増淵 文化財の価値を損なうような行為はいいけないわけですが、価値を損なわない範囲の中で、一体どんなアイデアが出るか。先ほど、竹田市のほうでは「もぐら会」という地元の団体が薪能をやるとか、あるいは音楽コンクールをやってみようとか、一方、下郷町のほうは大内宿で雪祭りをやってみようとか、こういった文化財を生かしたアイデアとい

文化財を生かす工夫

二十年から三十年は持ちましようけれども、それ以降になつてくると葺替えをしなくてはならない。その葺替えをする人たちがだんだん高齢化してくる。そうすると、葺替えすることができなくなつてくる時期が来るのではないかと思いますし、また家だつて何年も建つていくわけですから、老朽化してくる。老朽化してくる家をどういうふう建替えていくのかという問題もあるでしょう。

これから私どもが一生懸命に取り組んでいかなければならないのは、屋根の葺き手の問題、それから家を建て替えていくという問題、これらは町として積極的に取り組んでいかなければならないでしょう。また今現在、トタン葺の屋根の家もありますので、茅葺きに葺替えていくことも必要だろうと思います。



第47回 県立大南高等学校音楽コンクール
第2回 全日本高等学校音楽コンクール



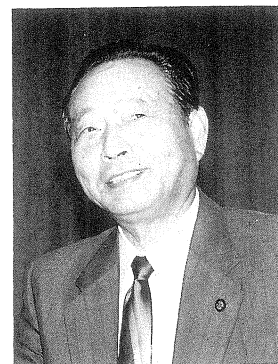
んで第四十八回瀬戸内音楽祭として第三回全日本高等学校音楽コンクールを開催します。県のほうも「一村一文化」ということで、竹田市は音楽のまちづくりの指定をいただいています。歴史が今日のまちづくりに与える影響は大きいと思います。

それと今年にはちょうど市制四十周年、中川入封四百年になりますので、岡藩七万石祭というのを竹田市の地域を超えて、旧岡藩の市町村がみんな集まりまして、岡城で大々的にイベントをすることになっております。しかし、これは一時的な盛り上がりですから、毎年そういった盛り上がりが出ていく仕掛けをしていかなければいけないと思っています。

先だって岡城で「幻の天守閣」というのを



岡城築城八百周年祭で、往時を彷彿とさせた幻の天守閣



後藤 宗昭市長

つくりました。これについては文化庁から、あそこには天守閣をつくっちゃいかんとおしかりを受けるんですが、建築士会と市民の有志が集まりまして、「いつべん岡城の天守閣をつくってみようや。お願いしてみようや」というので、特別に許可をいただきましてつくったわけです。そのかわり史跡を壊してはいけない、二十日間だけという条件をつけて、

古式ながら神式で御祓を上げて、手斧初めをやりまして、しめ縄を張って、天守閣をつくったわけです。そうしたら、大変な人が来まして、雨の日も風の日も、職員は連日びしょ濡れになって交通整理をやったんです。

二十日間だけの許可でしたから、市民からまた「何かひとつあんなイベントはできないのか」という声があるんですが、今、慎重に論議しています。

文化財が与える影響

増淵 文化財の存在というのはまちに何を与えるんでしょうね。

後藤 実は「公報たけた」に毎月、「こんにちは市長です」というのを書いているんですが、歴史について非常に論議されるんで、この間も書いたんです。歴史を学ぶ目的は過去を学ぶことではなく、現在を学んでいるのである。



増淵 徹調査官

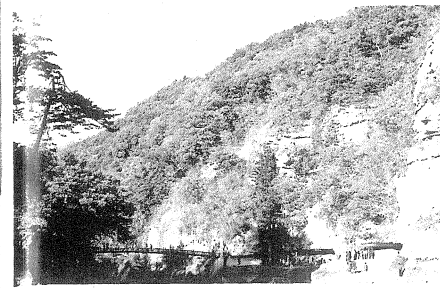
せられた大きな課題だと考えています。

湯野上温泉を拠点にバスで結びつけて、「点」の資源を「線」の資源にしていこうと努力しているわけですが、僻地のバスなものですから、存続そのものすら難しい状況になつてきておりまして、生活路線バスを観光路線バスにどう切り替えていくかということが非常に大きな課題です。

増測 下郷町には前から文化庁のほうでも「歴史の道」の整備を持ちかけておりますが、たしか大内宿を通っていますのは、会津の殿様が開いた参勤交代道ですね。そういうものを文化財のルートの一つに文化庁としても整備のお手伝いがないかなと思つてい

竹田市ではそういった散策路といいますが、そういう形でネットワーク化は行われているんじゃないか。

後藤 竹田市は補助金もいただいて、「歴史の道」を整備しまして、第一回は完成しています。住民の皆さんがいつも使っているところも「歴史の道」になっていきます。まちの中の「歴史の道」は、例えばその道の一角に「メロディートンネル」をセッティングしているんです。人間が入ったらセンサーが働いて、瀧廉太郎のメロディーがひとりでに流れてくる。ただ、



天然記念物 塔のへつり

いますか、ソフトという面での活用を考える努力、発想はもつと広がっていいなという気もするんですが、いかがなものでしょうね。後藤 私もそう思っています。日本の建築文化はソフトだと思います。日本の家は木と紙でできていて長続きしないんです。京都の家は百年以上たたないとあまり自慢にならないということですが、それは京都みないなところはそうでしょうが、通常の木造建築で百年といつたら、確かにかなり維持管理が大変です。伊勢神宮は二十年ごとにつくりかえて、ソフトを伝承しているわけですから、さすが神様だなと思つて感心して見ているんです。そういうのを岡城なら岡城を中心にやって、史跡を壊してはいけないから、短期間でいい

と思うんです。舞台はやつぱり岡城でないといかんわけですね。ほかのところをやつたつてダメなんです。そういうのをご理解いただければ、地元で組み立てていきたいという気がしています。

文化財ネットワークの構築

増測 今まで整備とか、技術の継承とか、さまざまな活用の例とか問題も含めてお話しただきました。もう一つ、先ほどのお話の中で、例えば大内宿だけではなくて、その近くの地域との関連といいますが、環境整備といったものを考えなくてはいけないのではないかとということもおっしゃったと思います。竹田市のほうも、実際には岡城以外にもたくさん文化財が散らばっている。

文化財の活用を考える上で、個々の文化財、単体をどう扱うかということだけではなくて、たくさん文化財がある意味でどのように結びつけていくか、あるいはそれぞれの文化財の周辺環境をどういうふう維持していくか。特に竹田市市長さんのほうは、町並み保存条例で実際におやりになっているし、またそういうところでの問題点も現在感じておられるということもお聞きしました。言ってみれば、地域全体の文化財のネットワーク、これにつ

音楽にうるさい人はいろいろ意見があるんですけども、トンネルに入ったら音楽が聞こえるというのはちよつとおもしろくて、概ね好評です。トンネルを出ると廉太郎の屋敷がありますから、セッティングはなかなかいいんです。「歴史の道」のスタートのところに郵便局ができたんですが、それも町並みにマッチした建物をプラスアルファの予算をつけてつくりました。ですから全体的に調和がとれております。

増測 今まで両方のお話を伺うと、住民参加と一言で言うけれども、一番大事なのは足元からの住民参加、日常活動からの住民参加が、まずは一番ベースになるということですね。

国への要望

増測 きょうは、文化財の整備・活用にはネットワークとか、ソフトの面でいろんなアイデアが必要であるとか、足元からの住民参加が必要であるとか、いろんな事例も含めてお話ししたいたんですが、最後に、文化財を保存して、いい方向での活用を考えていくために、ご注文があれば一言。

後藤 それにはまず文化財の予算を増やすということがありますが(笑)。

櫻木 下郷町には三十人ほどの屋根葺の職人

いて実際にどんなふうに取り組まれているかお話しいただければと思います。

後藤 町並み保存条例では、岡城、家老屋敷、武家屋敷の跡は特別区域で、高さも色も景観もすべて届出をさせていただいて、市のほうの指導に従ってくださいということになっています。強制はできないけれども、市民側からの要望もあつて条例ができています。

そのほか文化財をいろいろ連携させて組み立てるという問題では、九月を「文化財月間」にして、月間中は文化財バスなんかを出して、市民に直接文化財を見学してもらったり、説明をしたり、あるいは市外の人もご案内しようではないかと。

「文化財月間」にしますと、担当の文化財課がそれを機会に整備しますから、そういったねらいもあるんです。愛染堂あたりも今まできちつとけじめがつかなかったんですが、今年立派になりました。やつぱりつないでいかなければと思つています。

増測 下郷町のほうはいかがですか。

櫻木 下郷町は相当に広大な面積の中に大内宿、塔のへつり、湯野上温泉、中山風穴、観音沼森林公園、それから町でやっている養鱒公園というのが点在しているわけです。それをどう関連づけていくか、今、私どもに課



後継者の育成がいそがれる茅の葺替え

があるわけですが、高齢化してきているわけです。何とかして屋根葺の後継者を育てていかなければならない。その場合に、その時々の時だけでは後継者はなかなか育たないと思うんです。後継者を育てるには、ある程度身分保障というような形をつくっていかないと、なかなかできないと思います。そういう点について、ひとつお骨折りをいただきたいと思います。狭い範囲ではあるけれども、全国的に茅葺の屋根が復活しつつあるということもあるようですし、ぜひお願いします。

増測 きょうはお忙しいところを本当にありがとうございます。

地方公共団体の
1
取り組み事例

福井県

越前朝倉氏の ふるさと

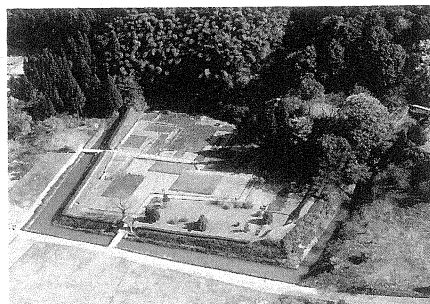
岩田 隆

特別史跡指定に至る経緯

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡は、戦国大名朝倉氏の館とその城下町で、応仁・文明の乱を利用して越前を統一した朝倉孝景から、天正元年（一五七三）に義景が織田信長に滅ぼされるまでの五代約百年間、越前の首府として栄えた。

遺跡は、上下の城戸や館の土塁跡、南陽寺跡、湯殿跡、諏訪館跡の庭園などが地表に表れていたもので早くから知られ、昭和五年には朝倉館とさきの三庭園と西山光照寺跡が国の史跡と名勝に指定された。その後遺跡全体を史跡公園化するという計画が持ち上がり、昭和四十二年には三庭園が発掘調査され戦国武将にふさわしい豪快な庭園が姿を現した。翌昭和四十三年からは朝倉館の発掘調査が実施された。厚い焼土や炭の下から焼けた礎石や溝石が並んで出土し、一乗谷滅亡時そのままの状態で遺構が残っていることがわかった。そうした折、農業構造改善事業による圃場整備が上城戸外の東新町地区で始まり、おびただしい量の遺物と遺構が露出した。この事

態を憂慮した福井県・福井市・文化庁はとりあえず圃場整備事業をストップして、地元と遺跡の保存について何度も協議を重ねた結果、昭和四十六年七月城戸ノ内地区を特別史跡に格上げ指定し、宅地を除く平地部を一括買収することで地元と合意した。指定面積は二百七十八ヘクタール、公有地化された面積は二十五ヘクタールとなった。そして歴史・建築・造園などの専門家や学識経験者による「特別



平面復元された朝倉館を上空から

史跡一乗谷朝倉氏遺跡研究協議会」の指導のもとに、福井県が朝倉氏遺跡調査研究所を設置して発掘調査と環境整備を担当し、福井市が史跡の管理を担当して共同で遺跡の調査や保護管理にあたることとなった。

発掘調査の結果

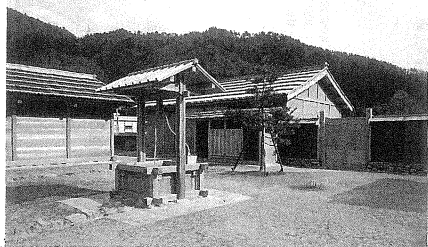
一乗谷に初めて発掘の鍬が入って二十七年、長期にわたる計画的な発掘調査によって種々の重要な学術的成果をあげることができた。まず、遺跡の中心となる朝倉館については常御殿や主殿を中心に茶室・蔵・台所・厩など十六棟の建物からなり、その構成は洛中洛外図に描かれている「細川管領邸」によく似ていることがわかった。また、城下町は南北に走る幹線道路を軸に三十メートルを基準単位として計画的につくられており、家臣団の武家屋敷を道路に沿って配置しているが、その屋敷の地口も三十メートルが基準となっている。内部の建物群は朝倉館の建物群を縮小統合した形を取っている。城下町を支える商人や職人の住む町屋は道路に面して軒を接するように建ち並び、その規模は地口六〇九メートル、奥行十二〜十五メートルで、井戸や炉・便所を備えている。町屋の中には出土した遺物や遺構から紺屋、念珠挽、鍛冶屋、鋳物師を想定させる家もある。また、ある屋敷からは医学書の断片や匙・乳鉢が出土し医師の家とわかった。寺院は、本堂のほか庫裏と

思われる建物が建ち、本堂の裏には墓地が形成されている。また、武家屋敷が分割されていくつもの小さな町屋になるなど一乗谷百年の間にも城下町が変化することがわかった。かつて戦国時代の城下は大名の館を中心として疎らに存在する武家屋敷や商工業者の家々といった、どちらかと言えば農村的な景観が想定されていたが、二十五年にわたる一乗谷の発掘調査で朝倉館を中心に武家屋敷や寺院・町屋が密集した、より近世の城下町に近い景観を描くことができたのである。

大量に出土した遺物からは、当時の生活が明らかとなった。朝倉館からは定窯の白磁や龍泉窯の青磁・建窯の天目茶碗や茶入れなど中国から輸入された高級品が出土している。



立体復元された町並み



復元武家屋敷内

こうした高級品は朝倉館だけでなく寺院や上級家臣団の武家屋敷からも出土し、華やかな朝倉文化を物語っている。また、朝倉館の濠から出土した将棋の駒は、館の警護にあたっていた武士が合間に指していたものと推定され、勤務状態が目に見えかねようである。町屋からも染付や青磁、白磁の碗・皿が多数出土したり、瀬戸美濃製ではあるが天目茶碗が多数出土して、都から離れた一乗谷でも茶の湯が非常に盛んであったことがわかった。灯明皿やバンドコ（行火）下駄や鉢、櫛、お歯黒壺など、当時の生活を具体的に物語る品々が多数出土している。

史跡の整備と活用

こうした成果を一般の人々に知ってもらうために、整備の基本方針は発掘して出土した遺構の溝や土塀の基礎を復元して屋敷の規模を表示したり、煉瓦とアスファルトで建物の範囲などをわかりやすいように整備して、埋め戻しせずに遺構をそのまま見せる露出展示をとっている。目の前に広がる館跡や道路に面して整然と並ぶ武家屋敷や町屋群は、直接見学者の視覚に訴え、往時の戦国城

下町を推定させるに十分と考えられる。また、出土した遺物については下城戸の外に一乗谷朝倉氏遺跡資料館を建設して「歴史や宗教、遊芸、生活、生産と流通などのテーマごと」とまとめて解りやすく展示し、年一回一乗谷朝倉氏に関連したテーマを選んで企画展を実施している。

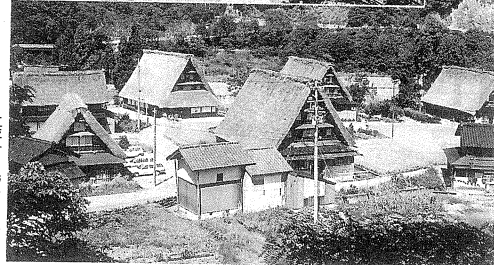
昭和五十六、七年度には、こうした遺構の平面復元から一歩進めて、平井地区の武家屋敷を立体復元した。さらに平成三年度からは文化庁の「ふるさと歴史の広場」構想に基づいて、この立体復元武家屋敷を核として通りに面した武家屋敷六軒分の門と塀、町屋十棟を立体的に復元して町並みを再現する事業を進めている。五年度には建物群が完成し、今年度は復元武家屋敷と町屋のうち三軒を紺屋や陶器屋等と設定して、出土遺物や絵画資料からレプリカを作成して当時の生活復元を行う計画である。これによって、より具体的に戦国時代の生活が理解されるものと思われる。

また、遺跡に対する他の省庁との協力については、遺跡を南北に貫いて流れる一乗谷川が建設省の「ふるさと河川」に指定され、自然石を使いコンクリートなどが表に出ないような護岸工事を行うなど、戦国時代の遺跡にふさわしい河川改修が進められている。

二十年前、一乗谷の発掘調査が始まった頃、一乗谷を訪れる人は年間一万人に満たなかつ



平村・相倉集落



上平村・菅沼集落

世界遺産に推薦された「合掌造りの里」

二集落が史跡として保存された昭和四十年代の半ばは、戦後の高度経済成長期でもあり、国民の心象風景ともいえる「うさぎ追いしふるさと」の原風景が全国から急速に姿を消しつつあった時期と重なる。ふるさとに対する人々の郷愁もあって、その後、毎年夏ともなれば都会から多くの観光客が五箇山を訪れるようになり、かつての「秘境」はにわかに活況を呈するようになった。

そこで懸念されたのは、富山県側と岐阜県側との国内法による指定区分の違いである。富山県側は国指定史跡。一方、岐阜県側の白川村萩町は重要伝建地区。この違いは、昭和五十一年の文化財保護法改正により伝建地区の制度が新設され、岐阜県側はその翌年、これにもとづく国の選定を受けたことによる。世界遺産は、各締約国がすでに国内法によって保護し、公開等の措置を講じている遺産の中から推薦することとされているから、ともに要件は備えている。しかし、世界遺産登録に向けて国内法上の区分を統一することが望ましいことから、平・上平両村は本年六月、伝建地区保存条例を制定し、相倉集落と菅沼集落をそれぞれ伝建地区に決定した（現在、重要伝建地区の選定を申請中。さらに、両村とも「自然環境及び文化的景観の保全に関する条例」を同時に制定し、集落周辺のバッファゾーン内の保全対策も講じた。

対する地元住民の関心を高め、また、保存の意識を高揚させるものであった。そこへ、昭和三十八年の冬、「三八豪雪」という記録的な豪雪によって合掌造り民家が倒壊するという事態が発生した。積雪は四メートル。出稼ぎと過疎化による人手不足から、屋根の雪おろしに対処しえなかったためである。この深刻な事態を機に両村では、合掌造り民家の保存対策、それも建物群として集落単位での保存が急務であると強く意識する。そして両村は、県教育委員会と国（文化財

保護委員会）を動かし、国・県・両村が一体となって保存対策を検討するなかで相倉・菅沼の二集落が保存の候補として浮上した。というより、現実には、すでにその時点で合掌造り集落として原形をとどめていたのは、この二箇所のみだったのである。住民との話し合いをへて、昭和四十一年の七月には史跡指定の申請にまでこぎつけた。また、保存の機運が盛りあがるなかで、両集落では、住民による自主的な保存組織として保存顕彰会が結成されている。

た。この状況は今も変わらない。世界遺産に向けて

政府が世界遺産条約を締結し、「姫路城」法隆寺地域の仏教建造物「屋久島」「白神山地」の四件が世界遺産に推薦された際、白川郷の合掌造り集落が世界遺産候補として「暫定リスト」に登録された。その後文化庁は、五箇山をこれに加えて一体として推薦する考えを示した。

そこで懸念されたのは、富山県側と岐阜県側との国内法による指定区分の違いである。

地方公共団体の2 取り組み事例

平・上平村

「世界遺産の村」 をめざして

岸本 雅敏

たが、現在では二十五万人を越えている。事業が進行中ということもあって、増加する来訪者に対する説明が現在のところ十分とはいえない。団体の来訪者に対しては、地元の人で構成する一乗谷朝倉氏遺跡保存協会が説明にあたっているが、個人に対しては福井市観光課によって、平成六年八月二十三日からF

M微弱電波によるラジオ説明が開始されたところである。現在は朝倉館から諏訪館跡庭園までのサービスであるが、今後これを遺跡の主要地区に拡げるなど、案内板や説明板も含めた、いわゆるソフト面での遺跡整備も拡充していく計画である。

（一乗谷朝倉氏遺跡資料館主任文化財調査員）

越中五箇山、合掌造りの里

富山県の南西端、岐阜県と接する山中に平村と上平村がある。これに利賀村をあわせた三村は越中「五箇山」と呼ばれ、その奥の岐阜県白川郷とともに「合掌造りの里」として知られている。礪波平野から険しい山また山を越え、庄川上流の奥深くわけ入った谷あいにある。冬には積雪が三メートル、ときに四メートルにも達する豪雪地帯で、かつては陸の孤島となることさえあった。まさに「秘境」といわれた地域である。

この五箇山と白川郷を特徴づけるのは、「合掌造り」と呼ばれる急勾配で切妻造り、茅葺き屋根の巨大な民家であり、またこれらによって形成された独特の集落景観である。緑濃

い山波を背景に天に向かってそびえたつ合掌造りの建物群は、威風堂々とその姿を誇り、初めて目にする人を圧倒する。ドイツの著名な建築家ブルーノ・タウトは、「これらの家屋は、その構造が合理的であり論理的であるという点においては、日本全国を通じてまったく独特の存在である」といち早く指摘している（篠田英雄訳「日本美の再発見」）。

住まいする史跡

合掌造りの建物とその集落は、かつて五箇山地方ではごく一般的な民家構造であり、集落形態であった。平・上平・利賀の三村にはかつて七十一の集落に千五百棟を超える合掌造りの民家があつた。だが、急激な社会情勢の変化、過疎化の動きのなかで急速に姿を消

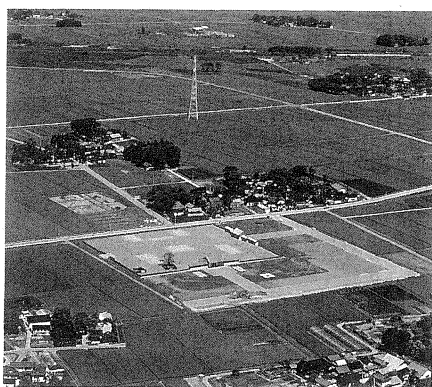
し、今ではまとまった建物群として現存するのは、平村の相倉集落と上平村の菅沼集落のみとなっている。

この二つの合掌造り集落は、昭和四十五年、「越中五箇山相倉集落」「越中五箇山菅沼集落」として、ともに国の史跡に指定された。ここに、人々が現実に住まいする「生きた」史跡が誕生する。そのころ伝統的建造物群保存地区（以下「伝建地区」という）の制度はまだなかったから、当時の文化財保護法のなかで保護措置を講じようと思いを絞った結果が、この史跡という選択であった。指定範囲は集落とその周辺の茅場・山林を含み、面積は菅沼が一四・五ヘクタール、相倉では四二ヘクタールにも及ぶ。こうして、合掌造り集落とその環境は、それ以降、一体として保全されることになった。

住まいする合掌造り集落が国指定史跡として保護された背景には、ひとつの「前史」が隠されている。昭和三十一年、国の民家調査の対象として五箇山地方が選ばれ、その年から二ケ年にわたって現地調査が実施された。合掌造り民家が減少の一途をたどっていた時期である。この調査によって合掌造り建物の重要性が国レベルで認められ、昭和三十三年には平村の村上家・羽馬家、上平村の岩瀬家の三棟が、同時に重要文化財に指定された。この指定は、身近で消えゆく合掌造り民家に

と考えられる。また、市条を東西に貫く道路は、市条の西約二キロメートルに位置する史跡城輪柵跡の東西センターの延長線と一致する。条里制遺構と政治的施設が結び付くことになった。また、昭和四十年代末から始まった北庄内の平野一帯での圃場整備事業に伴って、古代の遺跡群が発掘調査された。その結果、一般集落跡のほか、板塀に囲まれた郷倉様の倉庫群（酒田市生石2遺跡、同熊野田遺跡等）や大規模な祭祀遺跡（八幡町俵田遺跡、酒田市鷹尾山周辺祭祀遺跡群）、規模の大きい建物跡を伴う官衙（酒田市上ノ田遺跡）ないし寺院跡（八幡町堂の前遺跡、酒田市庭田遺跡）等も発掘されている。

これらの遺跡群は、南北方向や東西方向に



史跡城輪柵跡の全景——中央部分が政庁

ほぼ連続して並んでいる。また、発掘された建物遺構は、百五十棟近くに及んでいるが、数棟の礎石建物以外は、いずれも掘立柱建物で、竪穴式住居は検出されていない。沖積平地でもあり地下水が高いことに一つの要因がある。加えて、城輪柵跡を中心に、律令制の再構築を目指して集落や付属施設を計画的に配置したとも考えられる。

さて、史跡城輪柵跡は、山形県の北西部、日本海に面した庄内平野北半のほぼ中央やや東寄りに位置する。遺跡は、荒瀬川が形成した扇形状に張り出す標高十〜十三メートルの河間低地内の微隆地形上のほぼ中央に立地している。遺跡の中心部・政庁域は周辺より約一メートル程高くなっているが、これは発掘調査の結果、河川の自然堤防を核に、土盛整地していることが知られた。

城輪柵跡が最初に発掘調査されたのは、昭和六年のことである。この調査で、遺跡はほぼ正方位による一辺七二〇メートル方形の規模を持ち、そして、外郭各辺の中央部に八脚門を構え、また各四隅に二間×三間の櫓を配置していること等が明らかとなった。この調査成果を受けて、古代東北拓殖のため築造された柵跡」として、昭和七年四月、国の史跡指定を受け今日に至っている。

この時の出羽国府は、出羽柵がその機能を果たしたものと考えられる。庄内にあった出羽柵は、天平五年（七三三）秋田高清水岡に移転する。

その後、激しい歴史の荒波にもまれた出羽国府は、九世紀初め再び庄内に戻り置かれる。これが、現在の史跡城輪柵跡である。

城輪の地に置かれていた出羽国府が廃絶した後、再び歴史上で議論されるのは、十七世紀以降である。特に、宝暦十二年（一七六二）、吹浦大物忌神社神官であった進藤重記は、『出羽風土略記』を著わし、その巻之四において「木野内村と言あり。往古此辺に官人の居城ありて、城外に祀れる神を城輪大明神と称し、城地の内を城の内と称せしを後世、城を木に改けるにや」として、官人の居城の存在を論じた。この木の内は、史跡城輪柵跡の外郭西門跡の北西に広がる集落である。

ところで、東北日本海側においても条里制が施工されていたことを初めて示したのは、深谷正秋氏である。深谷氏は、昭和十一年、『社会経済史学』六十四誌上に「条里の地理的研究」の論文を寄せて、「羽前山形平野には、山形市の東、飯塚村、樺沢村、山辺町付近に残り、庄内で、飽海郡一条村近郊に似たものが残されている。」と記した。

当論文は、その後各方面に影響を与え、昭和六年に遺跡の概要が把握された史跡城輪柵跡の発掘調査の成果とともに、この時頃から、庄内での律令制についての具体的な議論が始まったと言っても過言ではない。昭和二十六年、柏倉亮吉先生は、『古代文化』VII―四誌上に、「東北地方の条里制を載せ、庄内の八幡町大字市条において、東西方向に五つの坪が並び看取れること、そして水田畔は南北方向であること等を示した。

市条は一条にあたり、条里制に由来する地名

地方公共団体の 3 取組み事例 酒田市

東北律令の里

小野 忍

こうした条件整備をへて、平・上平両村の合掌造り集落は、九月末、「白川郷・五箇山の合掌造り集落」として白川村のそれと一体でユネスコへ推薦された。

以上みたように、五箇山の合掌造り集落は、昭和三十年代の保護対策に始まり、四十年代の史跡指定をへて、こんにちまで受け継がれてきた。その保存を根底で支えてきたのは、法規制もあるなかで合掌造りの民家に住み続ける住民の方々である。相倉集落の住民は、すでに二十七年前、「歴史上の文化遺産である合掌造り民家を保存顕彰」と顕彰会規約の冒頭に謳っている。保存に対する住民の理解

とこの取組みが、今回の世界「文化遺産」推薦のいしずえとなったと言えるだろう。

このたびの世界遺産推薦によって、雪ぶかい五箇山と白川郷に全国から熱い視線が向けられている。合掌造り集落の保存と活用は、いま新たな段階を迎えたといえる。今後に寄せる期待とともに、課題も大きい。富山県では今、両村と関係各課からなる「世界遺産準備会議」を組織し、合掌造り集落の新たな保存と活用、地域づくりの道を模索し始めたところである。

（富山県教育委員会文化課副主幹・文化財係長）

「国府」に擬定できる。
発掘調査と併行し、史跡の保存と活用について文化庁の指導を受けながら、史跡の公有化と保存整備事業を行っている。

これまでの史跡保存は、現状のままに保存を図り、史跡を訪れた見学者は各自の想念で史跡に接することに主眼が置かれた。しかし、史跡地が全くの草生地等であった場合、事前の予備知識や案内施設がない時、一般の人びとがその史跡で想いをめぐらすことは難しい。史跡は歴史や建築学の専門家のみを対象とし



復元された南門



毎年政庁で行われる
国府の火まつり

たものではない。広く住民のための史跡の活用、活用を図る必要が望まれる。一般の人びとが史跡を訪れた場合、容易にその史跡についての理解ができるような工夫が要求される。遊園地まがいの設備をしなくとも、各々の史跡と地域にふさわしい、親しまれる史跡整備を考える必要がある。

このような基本的考えのもと、まず、城輪柵跡の整備すべき範囲と手法、また、遺構の発掘状況の展示や建物の原寸大復元の可能性についての適否、さらに資料館の付設と経費の算定が課題となった。昭和五十三年、整備計画に着手し、保存整備事業が実際に動きだしたのは昭和五十九年である。

平成元年、文化庁は新規事業として史跡等活用特別事業を始めた。史跡が理解され、親しまれることを目指した「ふるさと歴史の広場」事業である。その初年度分に、史跡城輪柵跡も採択され、懸案であった建物の原寸大復元が可能となった。この遺構復元事業を、城輪柵跡での中心的事業として位置づけたが、幾つかの課題があった。その第一は、近畿以東に平安時代の建物遺構が現存しないことであった。しかし、幸いなことに、発掘成果によって平面形や建築材として杉が使用され

ていたことが知られ、また、城輪柵近くで同時期の史跡堂の前遺跡から長押や斗、肘木等が多量に出土しており、復元設計や材料決定に反映できた。第二は、均一で良質な長大径の杉材を短期間に確保することである。強度上から天然杉が望まれた。これについては、秋田宮林局の全面的な協力が得られ、産地を分散することなく計画どおり調達できた。

復元した建物は、政庁南門および東門ならびに築地塀、目隠塀であるが、最終的な設計を決定するまで、細部について数案が検討され、また補足の発掘調査も行った。

平成元年に着手した広場事業による建物復元は、史跡指定六十周年にあたる平成四年三月竣工した。

平安時代の出羽国府跡・城輪柵跡政庁の南門や東門は、史跡を訪れた人びとに一千年の歴史ロマンを語りかけている。また、学校教育や社会教育の素材として活用されている。平成四年、本県で開催された「べにばな国体」の炬火リレーの引継地ともなった。

歴史的な環境の中で、伝統文化の伝承と発信を目指し、地域間交流の場として「国府の火まつり」を行っている。獅子頭をテーマに、庄内をはじめ、県内外、インドネシアのガムラン、沖縄県今帰仁村の琉球民俗舞踊等を招くなど、民俗芸能の祭典を繰りひろげている。毎年八月上旬、午後から夜にかけて行い、今

年で三年目を迎えた。郊外に位置しながらも、今年は二万六千人を超える人が、城輪柵政庁での国府の火まつりに集った。

ライトアップされた、各門が幻想的に浮かび上がり、静かな語らいの空間が醸しだされている。冬期間の活用が課題である。

城輪柵の歴史の広場は、史跡の所在する城輪および古川の両地域住民による城輪柵保存協力会の巡回活動によって、悪戯を受けて

いない。また、清掃や除草も適宜行う等維持管理に努めている。特に、年一回ではあるが地域の老人クラブの除草奉仕活動には、頭の下がる思いである。

本史跡を今後とも史跡として保存するには、行政のみでは困難であり、地域に密着した幅広い活用と住民の手による諸活動が、今後ますます重要になるものと思っている。

(酒田市教育委員会社会教育課長)

地方公共団体の 4 取り組み事例 豊岡市

コウノトリのまち

大 廣 井

豊岡市は兵庫県の北部に位置し、面積一六二・一平方キロメートル、人口約四万七千人の地方都市である。そして特別天然記念物コウノトリの野生最後の生息地として知られている。

豊岡市を中心とした但馬地方では、古く江戸時代からコウノトリを保護してきた歴史がある。特に当時の出石藩主はコウノトリを「瑞鳥」として、またその生息地である山林を「鶴山」として手厚い保護政策をとったのであつた。

明治時代に入ると、かつては全国各地で生息していたコウノトリは乱獲等により急速に

減少し、大正十年に「鶴山」が天然記念物に指定された頃には既に当地方だけに生息する鳥になっていた。

コウノトリは昭和二十八年に種の指定に切り換えられ、昭和三十一年には特別天然記念物として国家的に保護されることとなったが、地元豊岡市ではその一年前、昭和三十年に兵庫県知事を名誉会長、豊岡市長を会長とした「コウノトリ保護協賛会」が発足し、その後昭和三十三年には「但馬コウノトリ保存会」と改称され、官民一体となった保護運動が展開されてきた。

子どもたちによる生態観察調査、営巣地や、

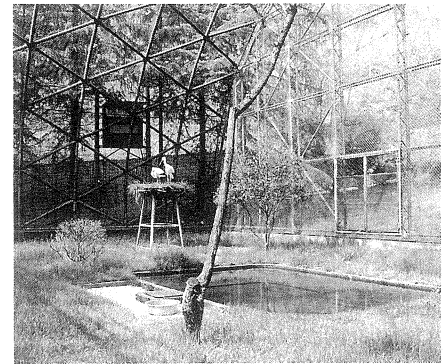
エサ場の環境を守る「そととする運動」、エサであるドジョウの寄贈を受ける「ドジョウ一匹運動」、また「愛の拠金運動」と保護活動は様々な形で行われた。

しかし、そういった保護活動もむなしくコウノトリの数は減るばかりで、昭和四十二年、最後の手段として「コウノトリ飼育場（現コウノトリ保護増殖センター）」での人工飼育にふみきった。そして昭和四十六年、野生最後の一羽が豊岡市内で捕獲されたことによりついに我が国の野外からコウノトリは姿を消してしまつたのである。

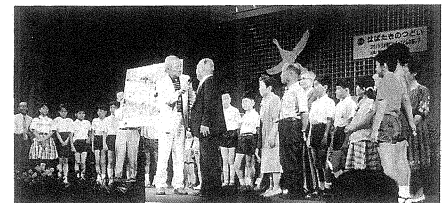
「……いったい何人の人が大空を羽ばたくコウノトリを見たことがあるのでしょうか。」



昭和30年代のドジョウ一匹運動



ようやく軌道にのったコウノトリの飼育



「コウノトリ未来・国際かいぎ」第2部。はばたきのつどい

寂しいことに私たちの世代は誰一人として見た人はいません。
わたしはみたい！ 元気に羽ばたくコウノトリの姿を！

これは今年六月に豊岡市で開催された「コウノトリ未来・国際かいぎ」その野生復帰を求めて」で中学生のメッセージの一節である。

人工飼育は苦難の連続であったが、平成元年、飼育場開設以来二十五年目にして初のヒナが誕生、以後毎年繁殖は成功し、現在四十一羽（この六年間で実に三十二羽の増羽）を飼育するに至っている。

うか。

そのヒントが未来・国際かいぎでたくさん見つかったように思います。

「コウノトリの町 豊岡から」

わたしたちは、世界に向けて訴えたい！コウノトリが、そしてすべての野生動物が幸せにくらせる社会とは
わたしたち人間も 幸せになれる社会なんだと！

我々豊岡市民には「瑞鳥」コウノトリを百年以上にわたって守ってきたという自負がある。そして農業生産重視の中で最後の一羽を救えなかったという慚愧の念がある。

市内中心部をゆるやかに流れる「母なる川」円山川、これを囲む水田と山々。コウノトリの絶好な生息環境を提供しつづけた典型的な盆地である豊岡の自然と、コウノトリと共に暮らしてきた豊岡市民。長い歴史の積み重ねがあつてこそ、今、コウノトリの野生復帰を胸を張って叫ぶことができる。

コウノトリの保護増殖、野生復帰事業が他の動植物、そして広く環境問題や農業問題などにも目を向け、市民はもとより全ての生きものにとって快適なまちづくりに連動していく確かな手応えを、今、豊岡市ではソクソクするほど味わっている。

（豊岡市教育委員会教育長）

地方公共団体の 5 取組み事例 根 尾 村

大地震の爪跡

所 美千敏

明治三十四年（一八九二）十月二十八日午前六時三十七分突如として東海地方を襲った濃尾地震は、岐阜県本巣郡根尾村を中心として起きた直下型の大地震である。地震の規模は、マグニチュード八・〇と推定され、日本の内陸部で起きた地震としては歴史上最大級のものといわれる。有感の範囲は、全国に及び北は仙台から南は鹿児島まで日本全体の六〇％にあたる。

この濃尾地震は、震源地の根尾村をはじめ各地に大きな爪跡を残した。根尾村の犠牲者は、百四十五名で当時の村人口の二・六％に当たる。全家屋千三百十九戸の内八戸を残して全壊、村は一瞬にして壊滅的な打撃を受けた。

同年十一月五日の岐阜日日新聞は、根尾谷の実況を次のように報じている。

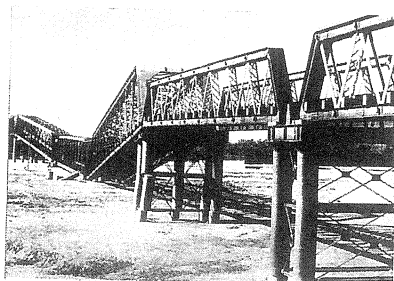
「今回地震の中心点とも云うべき根尾谷の惨状は、度々本紙に掲載せし処なるが、昨日来岐したる同谷板屋村川口鉄次朗氏の話聞くに、同村中被害の最も甚大なりしは、水鳥村より能郷村までにて、黒津・長島岡

を得てなされ大成功をおさめることができた。コウノトリの保護増殖、野生復帰事業は時代の追い風も受け、市民のコウノトリに寄せる思いがますます高まりつつあるのを感じる。市内・近隣の小・中学生からは、児童会、生徒会の活動としてコウノトリ募金が継続的に寄せられているし、「コウノトリに地元のエサを」とドジョウ養殖に取り組む人も現れている。豊岡市が三年連続で市民と共同で作成してきたコウノトリを題材に環境問題、共生社会を訴えたポスターはいずれも大きな反響を呼んだ。市民グループ「こうのとり応援団」が作ったコウノトリグッズ（Ｔシャツ、絵ハガキ等）も好評だ。

市内ではいたる所でコウノトリをモチーフにしたモニメント、橋の欄干、アーケード、マンホールの蓋等が目につく。

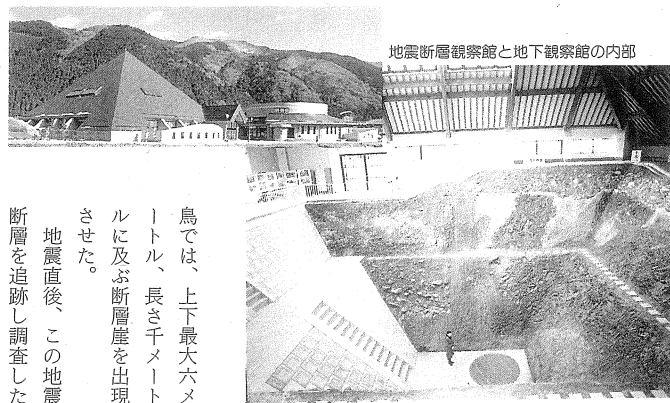
このような気運の高まりの中にあつて、コウノトリ保護増殖センターも開設以来一貫して純粹に種の保存のための施設という立場から非公開を続けていたが、平成四年から一部公開にふみきり、保護増殖事業の安定とともにその期間、範囲を広げながら要望に応えてきている。

再び中学生のメッセージを引用したい。
「そのためには、どうすればいいのか。わたしたちは、何をすればいいのでしょ



濃尾地震で倒壊した長良川鉄橋

小藤博士の発表により、大いに世界の学者の注目を引き、この断層の写真は、地質、地



地震断層観察館と地下観察館の内部

鳥では、上下最大六メートル、長さ千メートルに及ぶ断層崖を出現させた。

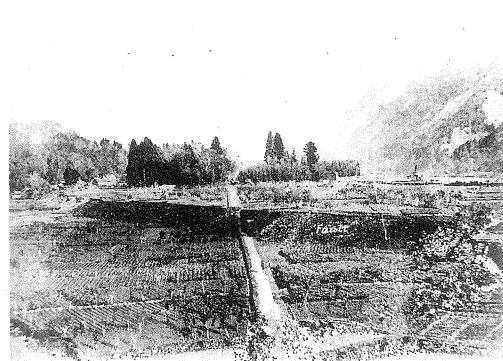
地震直後、この地震断層を追跡し調査した

村民は、高所々々へ逃れ居るよしなるが、此の辺は運搬交通の不便なるため物価非常に騰貴し、塩一俵八〇銭なりといえ、その他は推して知るべし。

白山（権現山二六一七m）は、震災の翌日より降雪ありて一白皚々其の形状弁ずべからず。その他の村落にては已に霜を降らせりと、又川口氏の話によると、田は或は陥り或は裂けたる為、地盤不均一なるのみか、水を保つべからざるより、来年に至つては、とても田作の見込みなく、去りとして地盤をならすは非常の費用を要するを以て、民力の及ぶべき処にあらず、水鳥村以北の人民は、悉く活動を失うべしとは、実にいたまじき話にて、今後の方策については当局者は勿論、天下の人に向つて救護の道を請うの外なきなり。

山の崩壊によつて山から土砂が滑り落ち、根尾川の流れを塞ぎ、やがて湖となり、この水は村に出て一層被害を大きくした。更に追いつ打ちをかけるように十一月二十六日以来の降雪と十二月八日の大雨は、村人の被害を一層悲惨なものにしたのである。

次に東海地方で最も被害の大きかった岐阜県の被害状況をもとめると、死者四千九百九十人、負傷者一万三千七百六十二人、家屋全壊五万一千戸、半壊三万三千四百五十九戸、同焼失四千四百五十五戸に及んだ。



震災当時の断層

鉄道は、西は天津から東は豊橋まで被害を受けた。木曾川・長良川・揖斐川の堤防が崩壊し、鉄道が破壊され、線路が曲がり、地盤がゆるみ、米原から岡崎まで完全に不通となった。

堤防の崩壊も至る所で見られ、県下では、四千五百六十二ヶ所に及んだ。山岳の崩壊は根尾・揖斐の山々に多く、表土が滑り落ちて全山裸の状態になった。県下の山崩れは九千九百二十九ヶ所。道路の破裂は、一万五千二十七ヶ所。橋の損壊は八千九百九十八ヶ所に及んだ。

特に岐阜・大垣などの市街地では、倒壊し

形等の学会誌や学校の教科書にも引用され、一躍有名になった。

その後、関係者の努力によつて、昭和二年に国の天然記念物に指定。更に昭和二十七年にその価値が認められて国の特別天然記念物に指定され、根尾村が法に基づく管理団体として保存管理に当たつてきた。

平成三年十月二十八日は、濃尾地震の百周年に当たる。根尾村では、その記念事業の一つとして、地震断層観察館の建設を計画し、平成四年には地下観察館を、平成五年には地震資料館を完成オープンした。

地方公共団体の6 取組み事例 大阪府

よみがえる古代史 ——近つ飛鳥の保全と活用——

広瀬 雅信

古代ロマンの里
大阪の中・南部、奈良県と府県境を接する辺り、南河内の一部の地域を古代の呼び名で「近つ飛鳥」という。奈良の飛鳥を「遠つ飛鳥」と呼ぶのに対してである。現在の行政区画では、南河内郡太子町、河南町を中心に富田林市、羽曳野市、河内長野市、千早赤坂村等の一部を含む広い地域がこれにあたる。

この地域は、古代にはいち早く仏教を受容して飛鳥文化の華を開かせた蘇我氏の本拠地

た各所より火の手が上がり猛烈な火災となり、突然修羅の巷と化したという。大垣市史によると「その傷を負い死を免れたるも、或は屋根を撓き、壁を破りて辛うじて屋外に出づる頃は、早や火焰八方に漲り、親を助け、子を救わんと狂気になりて焦るも、火は次第々々に我が家に近づきて、見る／＼父母妻子を焼死せしめ……（後略）」とあるように家屋が倒壊した直後には、火事が各所に発生し、倒壊した家屋の下にとり残された人や火にまかれた人々は焼死したのであった。

以上のように濃尾地震は、一瞬にして大きな災害を引き起こしてしまつた。「地震・雷・火事・おやじ」と昔から恐ろしいものの筆頭にあげられてきた地震は、今尚、その地位は譲つていない。昨年の秋、根尾村にアトリ（小鳥）の一群がやって来て二ヶ月程滞在した。空の一角を覆うようなアトリの一群を見た村の古老は、大地震の前兆と恐れ、また、今年のような日照りが続く、地震が起こるのではないかと心配する。地震の恐ろしさは、いつ起こるか予測できないこと、いきなり発生して大きな災害を引き起こすことにある。

しかし、考えてみれば、地震そのものは災害でもなんでもない。自然現象であり、地球の営みの一つに過ぎない。この自然現象である濃尾地震によつて生じた根尾谷断層は、総延長八十キロメートルに及び、特に根尾村水

濃尾地震の体験者は一人もいない。「災害は忘れたころ来る」といわれる。大災害の記憶の風化をくい止め、災害に対する心構えを子々孫々と伝える拠点にするともに、濃尾地震の記念である根尾谷断層を根尾村の、いや日本の大切な文化財として、活用し守り続けていきたいという願いを地震断層観察館にこめている。

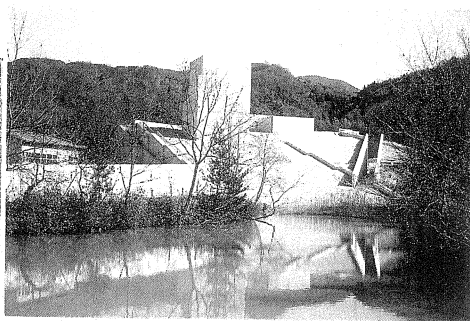
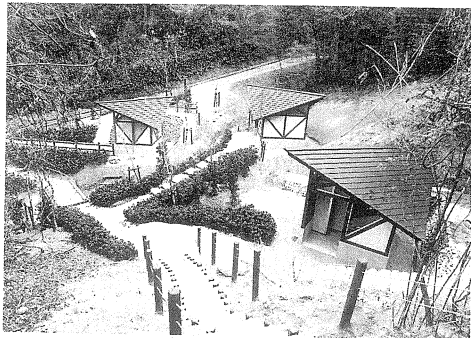
（根尾村教育委員会村史編集担当）

〈参考文献〉

「根尾村史」写真でみる濃尾震災（岐阜新聞・岐阜放送）
「濃尾地震と根尾谷断層」（岐阜県根尾村教育委員会）

であり、古代の官道竹内街道が通過するところでもある。周辺には天皇陵を含む多くの古墳や古代寺院跡等が分布している。国指定史跡だけを取り上げてみても、古墳では横穴式石室に二個の家形石棺を蔵し、唯一確実な双円墳として著名な金山古墳（河南町）、観音塚古墳（羽曳野市）、双子塚古墳（太子町）が、寺院跡には通法寺跡（羽曳野市）、鹿谷寺跡、岩屋（太子町）、観心寺境内、金剛寺境内（河内長野市）等がある。また宮内庁所管の陵墓

整備の進む風土記の丘



アスカディア・古墳の森内の府立近つ飛鳥博物館

館の建築は安藤忠雄氏の設計で、地形を巧みに活かした階段状の外観と内部の空間構成がダイナミックなものである。内外ともコンクリート打ち放しの構造は博物館としてはたいへんユニークなもので、ファンの多い安藤氏の作品のなかでも、昭和五十九年の日本芸術大賞受賞作品という話題性が集客効果を生み、展示のおもしろさと相まって開館以来の

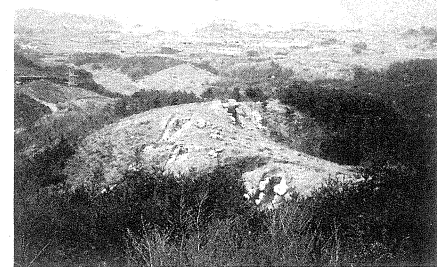
それぞれのテーマに、これまでの発掘調査で蓄積されてきた膨大な遺物ストックをはじめ、精巧なレブリカや模型、映像を多用したビジュアルな仕上がりで、展示法は弥生文化博物館で好評を博した開かれた展示を基本的に継承するなど、来館者が参加し、楽しみながら古墳時代を理解できるものになっている。特に仁徳天皇陵古墳の一五〇分の一の模型は直径十メートルにも及ぶもので、模型のなかに古墳の築造や葬送の儀式、集落での人々の暮らしなどの様子を精巧な人形で再現している。一体ずつの地形や建物、周辺の景観を構成する樹木などは極めて小さなものであるが、それぞれ厳密な考証を重ねたもので、どこを拡大してみてもいいかげんな部分がないのが自慢である。ハイビジョンの映像には、大阪の誇る無形文化財文楽人形の聖徳太子や手塚治虫の火の鳥が案内役として登場するし、保存処理に十四年を費やした木製ソリ「修羅」の展示は圧巻である。

として敏達、推古、用明、孝徳等の歴代天皇陵や聖徳太子の墓のほか、葉室塚古墳、小野妹子の墓等の古墳が集中して宮まれ、これら古墳群を形成する磯長谷は古代史ファンからは「王陵の谷」と呼ばれ、親しまれている。

一須賀古墳群の保存

今回紹介する一須賀古墳群は、「王陵の谷」の南側に広がる丘陵の尾根上に、かつては数千とも言われる後期古墳が密集した我国を代表する群集墳である。

学史的にも著名な群集墳で、古墳時代後期の社会状況を考究する上で高い学術的価値を有する古墳群として、平成六年十月に古墳が密集する部分約四八・八ヘクタールが史跡に指定された。指定地は「府立近つ飛鳥風土記



発掘調査中の一須賀古墳群

の丘」とゴルフ場開発予定地内の自然緑地の二つの区域に大きく分けられる。ゴルフ場開発予定地については、今回古墳の密集する三つの尾根をゴルフ場の自然緑地に取り込むかたちで指定することになった。

一須賀古墳群については、これまで開発と保全をめぐる長い経過がある。一九六〇年代の後半の列島改造の波に乗って、一須賀周辺にも宅地開発の波が押し寄せた。このころ一須賀、葉室の開発からんで、開発の障害となる古墳を組織的に破壊するという事件までおき、一須賀古墳群は壊滅的な打撃を受けた。しかし、このことは逆に社会的な注目を一須賀に集め、保存を求める声が高まる結果になった。事態を重く見た大阪府は、昭和四十五から四十八年度に古墳の最も密集する地域を公有化し、四十七から四十九年にかけて三十基の古墳を発掘調査、四十九、五十年年度には国の補助金を受けて風土記の丘として整備を実施した。さらに、昭和六十から六十一年度に一部の古墳の修景整備、管理棟、駐車場、園路、説明板の設置等を経て、一般に公開した。

その後も風土記の丘隣接地では幾度か開発の話が持ち上がったのは消えていったが、結局ゴルフ場開発が本決まりとなり、その保存協議のなかで保全すべき緑地を古墳が密集する三つの尾根に集中することで開発側と折り合

いをつけ、さらには、たとえゴルフ場以外に用途が変更されても保全が担保されるよう史跡指定の آمいをかぶせたのである。周辺にはまだ追加指定すべき地域が若干残っているが、現存する古墳群の相当の範囲が保存されることになったことは喜ばしいことであり、協力してくれた地元地権者を始め、文化庁ならびに関係諸機関の努力に感謝したい。

博物館の建設

さて、先に開園した風土記の丘は資料館等のガイダンス施設もなく、公開する古墳の数も限られていたことから、早くから内容の充実を求める声が多く聞かれた。また、以前から本格的な府立の博物館建設の必要性も叫ばれており、一須賀古墳群の近接地にもそのガイダンス館として近つ飛鳥博物館が計画されることになった。府立博物館の第一号は和泉・泉大津両市に所在する史跡池上曾根遺跡の隣接地に平成二年にオープンした弥生文化博物館である。この博物館は弥生文化の総合的な展示と研究センターをめざしており、その基本コンセプトが一定の成功を収めていることから、近つ飛鳥博物館も一須賀古墳群のサイトミュージアムという狭い守備範囲ではなく古墳文化を大きなメインテーマに据えて計画されることになった。展示は、三つのゾーンに分かれ、「近つ飛鳥と国際交流」、「古代国家の源流」、「現代科学と文化遺産」をそれ

入館者数は順調な伸びを示している。

館の愛称は「アスカディア・古墳の森」という。一般公募で決めたものである。

風土記の丘の再整備

近つ飛鳥博物館の開館は不十分であった風土記の丘の整備にも追い風となり、館と一体となった歴史公園としての活用をさらに進めることができた。平成五年に五基の古墳、二基の窯跡の修復と修景、身障者用トイレ、展望台・園路の増設、防火水槽の設置、梅林の造成等の整備を行った。特に園路やトイレは車椅子での利用が可能なもので、不可欠のものとはいえ、丘陵上の尾根筋に展開する古墳群の見学施設としては苦心したところである。

今後の課題としては、石室内への遺物レブリカの展示や遺構全体模型の設置、音声による解説装置等さらにきめ細かなサービスが求められる。史跡としての管理上の責任も果たさなければならぬが、多くの人々の利用を進めるにはある程度多目的に使える空間も必要となる。

いずれにせよ今後永く利用され、発展していける施設にするためには、イベントによる人寄せではなく、日々の努力で施設を魅力あるものにしていかねければと思う。愛情を持って史跡と付き合っていきたい。

(大阪府教育委員会文化財保護課記念物係主査)

11月文化庁行事予定

- 1～6日・世界文化遺産奈良コンファレンス（奈良県新公会堂）
- 2日・日展開会式（東京都美術館）
- 3日・芸術祭鳥取公演記念式典（鳥取県立県民文化会館）
- 4日・国語施策懇談会（広島ガーデンパレス）
- 9日・国語施策懇談会（東京会館本館）
- 10日・平成6年度地域文化功労者表彰式（東京・如水会館）
- 14日・平成6年秋の叙勲 勲章及び賜杯伝達式（国立劇場）
- 15日・平成6年秋の紫綬褒章、藍綬褒章及び黄綬褒章伝達式（東京・如水会館）
- 16日・日展授賞式（日本芸術院会館）
- 18日・文化財保護審議会（文化庁）
- 25日・平成6年度文化庁長官表彰式（霞が関東京会館）
- 26日・第44回全国民俗芸能大会（東京・日本青年館ホール）
- 28日・文化財行政講座（東京・三田共用会議所）

文化庁月報 11月号（通巻314号）

平成6年11月25日印刷・発行

編集—文化庁

〒100 東京都千代田区霞が関3-2-2

発行—株式会社ぎょうせい

本社 〒104 東京都中央区銀座7-4-12

電話03(3571)2126

営業所 〒162 東京都新宿区西五軒町4-2

電話03(3268)2141（代表）

振替口座 00190-0-161

印刷所—㈱行政学会印刷所

定価530円（本体515円）送料76円

年間購読料6360円

本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合わせ・申し込み先

㈱ぎょうせい営業第一課宣伝係

電話03(3269)4145（ダイヤルイン）

©1994 Printed in Japan

ISSN 0916-9849

編集後記

日本全国、各地域にそれぞれ固有の文化財が、今もなおひっそりと眠っています。「保存」を重視してそれをそのまま眠らせておくか、あるいは「活用」を重視して史跡等の整備を図るか、まさに各地域社会の思惑如何にかかっているわけですが、経済的な観点を考慮しないで言わせてもらえば、地域住民のひとりひとりが地元を誇り得るような文化財の活用方法を考えていることが、今は求められているのではないだろうか。個人的には、東北・関東を中心に数多くの史跡等を見えてきたが、最低限、標識や案内板を配置して、付近に出土物等を展示する資料館があれば、あえて城郭や門等の建造物を復原しなくても、苔むした石垣や礎石、土塁等を眺めているだけで、はるか古代・中世のロマンに浸ることができる気がします。いづれにせよ、各地域が歩んできた歴史の足跡を損なうことなく、文化財の保存・活用が図られることを期待してやみません。（栗）